

天理市小路遺跡における古墳時代後期の井戸祭祀と斎串の問題

谷野誠也⁽¹⁾・瀬部和宏⁽²⁾・小林青樹⁽³⁾・垣内翼⁽⁴⁾

(1) 奈良大学大学院文学研究科・(2) 徳島県 未来創生文化庁 文化資源活用課・(3) 奈良大学文学部・(4) (公財) 兵庫県まちづくり技術センター

1. 古墳時代に遡る斎串の研究

斎串は、薄板の先端を尖らせる串状の木製祭祀具である。「削りかけ」「挿格帛木」「斎串」など様々な名称が存在し、万葉集で神主部に斎串を立て、供えたとする歌の記載から「神聖な木」の意味をもつ「斎串」の名称が最適であると考え、以後、その名称が浸透する(黒崎 1977)。斎串は、律令期の祭祀遺物と共存することが多い。律令の祭祀は、法的体制である律令が整備され、国家的な祭祀を指す。その律令の祭祀形態は、8 世紀初頭の大宝律令によって成立したのではなくそれ以前に律令の祭祀の「先駆的形態」たるものが存在したと考えた(井上 1978)。7 世紀後半の天武・持統朝の時期に相当する藤原宮下層遺河 1901A から人形や馬形などの新種の木製祭祀具が出現し、以後、段階的に増加することから律令の祭祀の画期とした(金子 1980)。また、これらの資料は、「作りや形に拙さが残り斎串が定型化する以前の姿を示していると思う。」と述べ、天理市和爾・森本遺跡や静岡県神明原・元宮

2. 斎串の分類と法量

大和では、古墳時代後期に遡る斎串につながる木製祭祀具を用いた井戸祭祀は天理市小路遺跡のほか、天理市和爾・森本遺跡と田原本町保津・宮古遺跡で確認されている。ここではこの種の木製祭祀具を「プレ斎串」と仮称する。

古墳時代に遡るプレ斎串は 3 類(A～C)に分類できる(図 4)。

A 類: 矛形をなすタイプで、切れ込みをいれる場合がある。

B 類: 先端は三角で圭頭形をなし、下端はやや細身の三角形形状をなす。断面は三角形に加工する場合がある。

C 類: 先端と下端が方刀状をなし、刃の角度は上下端で対称をなす。柱目材を使用する場合がある。

これらのほか、和爾・森本遺跡の先端が丸みをなす図 1～2 については、当初から丸みをもつかどうか不明なため今回は分類から外した。また、保津・宮古遺跡の図 2～3 の下端付近には両側面にわずかに挟り状をなしている。A 類はおそらく後期以前の矛形木製品を祖型とし、B 類も後期以前の矛形木製品の身の部分を祖型とした可能性がある。そして、C 類は後期以前の刀形木製品を祖型にしたと考える。法量については、図 5 の 3 遺跡のデータでみると明確に分離され、特に保津・宮古遺跡と和爾遺跡は型式ごとの法量分布が類似しており一定の規格性がある。特に B 類の類似度は高い。古墳時代に遡るプレ斎串の井戸出土例は大和のみであり、両者は細部に独自性をもちつつも、同様な祭祀形態を共有していた可能性がある。一方で小路遺跡では、全体的にプレ斎串は小型化しており、上部の左右側面に切れ込みを有するものがあり、7 世紀以降に繋がる初源の様な様相をもつ。なお 7 世紀代におけるプレ斎串系の問題については今後の課題としたい。また古墳時代に遡るプレ斎串は、前橋市元総社神明神遺跡例(古墳時代中期後半)を最古例に数例が存在する。大和以外の事例を含めた分類などの検討は今後の課題である。

3. 井戸の構造と斎串の出土状況

プレ斎串の出土する遺構は大半が流路であるが、大和盆地内では井戸からの出土でかつ比較的近隣に分布するという祭祀形態が共有されたかのような状況を示す。しかし小路遺跡に関しては井戸構造と祭祀形態に他の 2 遺跡とは違う特徴をもつ。

まず井戸構造については、小路遺跡と和爾・森本遺跡は独自の構造を有する点、扉材のような一般住居とは異なる建物の存在を示す建材が転用される点は共通する。だが技術面においては縦板と横板を合わせた「長辺横板短辺縦板組み(図 8)」の和爾・森本遺跡より、90 度ごとに柄穴を穿孔し棧を差し込み骨組とする「縦板組み横棧隅柱型(図 7)」の小路遺跡の方が高度であり、後世にみられる構造とも共通する。祭祀形態(図 6)についても、和爾・森本遺跡と保津・宮古遺跡は農具を伴う日常的な祭祀であるのに対し、小路遺跡は形代のみで性格が異なる印象を受ける。また斎串自体も切れ込みが多く、後世のものと類似する特徴をもつ。埋納される土器の数量に関しては、古墳時代後期の井戸祭祀では少数となる傾向がみられる(山崎 2005)が、小路遺跡はそれとは対称的な出土状況を示している。

以上のように小路遺跡は井戸の構造や祭祀形態において、同時期の 2 遺跡だけでなく全体と比較しても際立った存在といえる。むしろ、そこには後世との共通点が多くみられ、「律令的祭祀」との関連も示唆される。「律令的祭祀」は以前から存在していた祭祀具や大陸の祭祀具を再編成して成立された(金子 1980)とする意見がある。これを踏まえて大和盆地内でのプレ斎串を用いた井戸祭祀を考察すると、古墳時代における斎串は和爾・森本遺跡や保津・宮古遺跡のように日常的な祭祀に用いられる場合や、小路遺跡のようにそれとは異なる祭祀に用いられる場合があるなど様々な面をもつ祭祀具であったが、律令の祭祀として整備する際に他の祭祀具と共に再編成された状況が想起できる。また、そうした再編成のもととなった独自の祭祀形態などの背景には、有力豪族が関与した可能性も大きいと考えられるため、両者の関係を追求することは今後の検討課題といえよう。

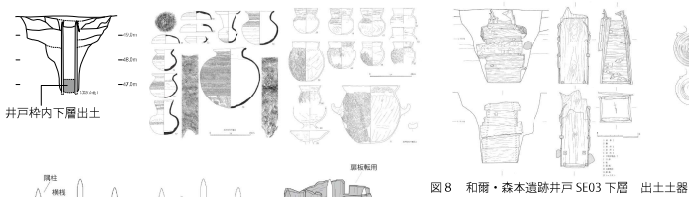


図 8 和爾・森本遺跡井戸 SE03 下層 出土土器

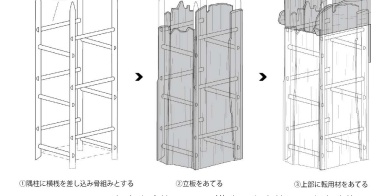


図 9 保津・宮古遺跡井戸 SK1102 出土状況模式図、出土遺物

川遺跡などの 6 世紀後半に遡る出土例を挙げたうえ、斎串が人形などの木製祭祀具と、密接に関わる点からその上限について慎重な検討を行う必要性を説いている(金子 1988・2000)。律令の祭祀を構成する木製祭祀具の起源の多くが古墳時代後期に遡る点、藤原京廃都後においても継続する点などから、木製祭祀具と政治的な変革との関係は希薄であるとし、政治的な契機によって成立したという説を批判した。斎串に関しては、古墳時代から飛鳥時代前半のものは日常農具等と共存する場合が多いため、生活に伴う日常的な祭祀とみている(泉 1989)。7 世紀前半の日本各地の遺跡から出土した木製祭祀具及び古墳時代後期における祭祀については、これらの遺跡から出土した祭祀具が多種多量かつ大規模であることから泉の考察とは異なり、日常的な農民レベルの祭祀ではなく、首長層が掌握し、道教の影響を受けた農耕の祭祀である可能性を指摘した(古川 1991)。

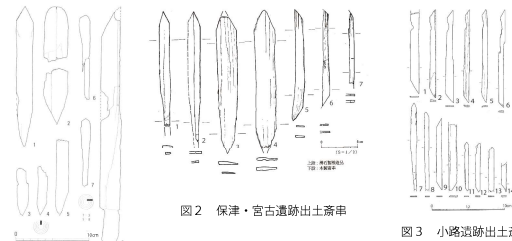


図 2 保津・宮古遺跡出土斎串

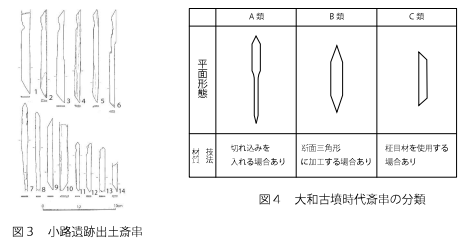


図 3 小路遺跡出土斎串

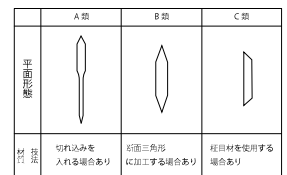


図 4 大和古墳時代斎串の分類

		小路遺跡 (SE02)		和爾・森本遺跡 (SE03)		保津・宮古遺跡 (SK1102)	
		形状の有無	数量	形状の有無	数量	形状の有無	数量
形代類	斎串	○	4	○	7	○	7
	馬形	○	6				
	小型馬形	○	2				
刀形	刀形			○	1		
	やの柄	○	2				
農具類	農具			○	1	○	1
	主眼			○	1		
種子類	白子					○	1
	黒子					○	少数
貝類	貝					○	少数
	貝					○	少数
共有物計		14		10		9	
紅銅類	金	○	4			○	1
	金	○	4			○	1
	銀	○	1				
	銅	○	1				
	銅	○	1				
土器類	土器			○	2		
	土器			○	1		
	土器	○	5				
	土器	○	5				
	土器	○	1				
土器計		23		4		3	

図 6 大和古墳時代斎串の共有物一覧

4. 保津・宮古遺跡の井戸祭祀と衢の祭祀

保津・宮古遺跡の井戸 (SK1102) は、推古朝期の南東に斜めに走る太子道(筋違道)とこれに東西にやや斜行しつつ横断する保津・坂手道の交差する地点付近に所在する(図 10)。こうした道路の交差する場所は衢(ちまた)と呼ばれ、ここでは外界から訪れる悪霊などの侵入を防ぐため祭祀が行われた(唐古・鍵考古学ミュージアム 2006)。こうした衢の祭祀は、7 世紀初頭頃から行われたという見方があるが、両道路はいずれも条里制施行以前の斜行道路で古墳時代後期が終末に遡る可能性がある。また、保津・宮古遺跡では別の遺構から後期以前の石製模造品が出土しており、ほぼ同位置で継続的に祭祀が行われており、衢の祭祀のような境界祭祀が早くから行われていたと考える。そして、こうした祭祀が衢の祭祀の祖型となって律令期以降の官道の祭祀に繋がったと考える。

大和における律令期の斎串につながるプレ斎串は、衢の祭祀以外に小路遺跡と和爾・森本遺跡では豪族居館ないしは拠点地の井戸祭祀に伴うものと考えられる。この両者の祭祀がどのような祭祀かは不明であるが、他に前橋市元総社神明神遺跡例も豪族居館に関連する。これに対して保津・宮古遺跡の衢の祭祀である井戸祭祀が具体的にどのような行為であったのかについては今後の課題である。なお、小路遺跡と保津・宮古遺跡は、ともにそれぞれの地域と深く関わる豪族と推測される穂積氏が繋がっている。この背景や意味についての解明も今後の課題としたい。



図 10 筋違道(太子道)と保津・坂手道の交差点と保津・宮古遺跡の井戸 (SK1102) ★の位置が斎串出土井戸の位置